

同文類聚 42711 紀下 248P
同文類聚 42712 紀下 249P

4.287

④ 4256P
4261

3713 10行

蘇我入鹿、斑鳩宮を襲う

皇極紀二年（六四三）九月六日条に、

息長足日廣額天皇（舒明天皇）を押坂陵

に葬りまつる。或本に云はく、廣額天皇を呼

して、高市天皇とすといふ（舒明天皇）

とある。（第七十九章八讓位）の項において

既述

とはい元、皇極二年九月当時、太上天皇

（舒明上皇）は、蘇我大臣蝦夷と共に、西の

大倭国（肥後国）の小墾田宮の方で、国史編

纂の作業に専念しておられたとであらう、と

想像される。

同年の皇極紀二年十月三日条に、

群臣・伴造に朝堂の庭に饗たまひ賜ふ。

而して位を授けたまふ事を議る。

遂に、國司に詔したまはく、

前の勅せる所の如く、更改め換ふこと無

く、前の任けたまへるところに之りて、爾の

原稿
昭和249P

4,288^P - 1/2

かみ
肝要 508[°]
非常に大切なこと

紀上74[°] 標註→日本紀標註
通証→日本書紀通証

治す所を慎めら

とのたまふ

とある。

■ 標註 (日本紀標註) は国司の交替を停

めたのだと解し、通釈 (日本書紀通釈)

は勅はいかなるものか知り難い、という。

「日本書紀」(日本古典文学大系、岩波書

店、二四八頁、注一六参照)

● ようするに、後代の読者がよく理解できな

いように、肝要な点を省いて述べている

のであろう。

● あえて述べると、

(1) 皇極天皇は勅し

「西の国から東の国へと、国司の国替えを

押し進められたし

ということなのでなかろうか。(後述)

(2) ところか、その国替えに對して、国司たち

から強い反発があつたのだらう。

(3) しか、皇極天皇は、

前に勅せる所の如し更に改め換ること無

ちせつ ち
稚拙 1428^p

かよう ち 508^p
肝要 非常に大切なこと、肝腎

かゝん
日本紀傳の二と紀上74^p

4.288^p-2/2

HV

前々頁
2059

し。厥の任けたまへるところにえりて、^{(い)ま}爾の

治す所を慎め^し

と仰せられたのであろう、

と想察される。

つまり

13.5⁹⁴ 任命されたところにえりて^ま罷りて^ま

其所を治めよ^し

と詔されたように思われる。(要検討)

それにして、^(*)一体、どうしたというのだ

らうか。

蘇我氏が、突如、自滅への道をひた走り始

めることになる。

皇極二年十月六日、蘇我大臣蝦夷は、^{やまひ}病に

よって、^(東の)朝廷に出仕しなかつた。

蘇我大臣蝦夷は、^{12.5⁹⁴}いつのにか定かにな

りか、私的な所において、^{おほ}紫冠を子入鹿に授

け、^{おほ}大臣の位に擬えた。また其の弟を呼ん

で、物部大臣と言った。

それは、^ま全くのたわむれ^ただったため

あろう。^{*}もしかしたら、^{すん}寸麿上でのことだ

たのかも知れない。^{幼いころの}

「して」④4271-1/2

太子④4228

4.289^P-1/3

④4225^P 記F197^P157

④4225^P

*蘇我氏は邪臣だったと言いたげな挿話である。

さて、皇極紀二年十月十二日条に、

「蘇我臣入鹿、独り謀り、上宮の王等を

癸すて、古人大兄を立てて天皇とせむとす。

云々

太いゴキ

とある。

父である蘇我大臣蝦夷は、東の都に居な

そこで、蘇我臣入鹿は、独り謀り、

へ舒明天皇の長子である古人太子（母は蘇

我馬子の女法提郎媛）を立てて、天皇にすべ

きだ

と主張したように解さる。（第470回）

へ上宮太子の万世一系の思想からいえば、

舒明天皇の長男である古人太子が天皇になる

べきだ

というわけなのであろう。

もつともな主張であつた。

「か、東の都の人々は、

へ推古天皇崩御直後、境部臣摩理勢（馬子

の弟であらうかという）か山背大兄王を擁し

て戦いに臨み、境部臣摩理勢は絞殺され、敗北

・カウー

・右頁右上(1/4)
に、大きくはみ出
して掲載下か。

4,289^p - 2/3

*著作権許諾は、
不要です。



右 1111 1111

1406

第470回

蘇我入鹿 (？～645)
談山神社蔵「多武峯縁起絵巻」から

1306

『朝日新聞』平成22年1月22日付 蘇我入鹿<典臣の汚名>スベ<日は>参照
「藤氏家伝」によれば「隋から帰国した僧曼の学堂に 中臣鎌足らと学が『最優秀者』と評
された。

した ✓

という経緯があつたとはいへ、^{いま}今もなお

山背大兄王を慕つた。

●蘇我臣入鹿は、上宮の王等の^{せいぼう}声望が^{くに}国中に

さかんなものを、ひどくにくんだ。(皇極紀二

年十月十二日糸参照)

こうして^{ふるひとのおほえ}古人大兄を^{いただ}戴く蘇我臣入

鹿の^{ぐん}軍と、山背大兄王の^{ぐん}軍とが、^{あいだ}相對峙する

ことになった。

*

⑦ 4287^P
357

皇極二年

六四三

元
1270?

$\frac{1}{2} \times 288 \times \frac{1}{2}$ 1カ、④ $4288^{1-1/2} 19$ 年
 ④ $4289^{1/2}$ #二下 $184''$ 三、
 19年 三、
 紙 ± 250

4.290^P 井上下184^P
 ④4290^P 3分

上4人 云2296⁸
予目 高か波小2 和1 浦津
「2297」 ④ 4281⁸
④ 4309⁸

十一月一日、ついに戦端が開かれた。蘇我
 臣入鹿は、小徳巨勢徳太臣。大仁土師娑婆連
 を遣わして、斑鳩の山背大兄王等の軍を襲わ
 せしめ、山背大兄王軍の他に見えず。

この時、奴の三成が数十人の舎人とともに
 出で防戦した。土師娑婆連が矢に当って死ん

味みであつた。
 戦況せんきやうは、
 山背大兄やまのうのおへえの軍ぐんが押さへおし水気みづき

山背大兄は、馬の骨を内寝(寝殿)に投(な)げ置き、
 馬山に隠(かく)れた。数(すう)人の者達(ものたち)が、つき従(したが)つて、
 隙(すき)を見て逃(に)げ出し、生(な)

それにしても、
 山背大兄は、どうして馬の骨を
 内寝に投げ置いたのであろうか。

骨^{ほね}が敵^{てき}軍^{ぐん}をまどわ^いせるだ^うう^う。 〽斑鳩^{はんこう}宮^{みや}がこ^の直^ち後^くに炎^{えん}上^{じやう}し、焼^やけた馬^{うま}の
と予^よ見^{けん}し^ての行^{こう}為^いだ^つたの^だう^うか。

● そうかも知れないが、――！ そんな望はある

知る由もない
地 矢のたけの年かか
方法もない

はせん
所詮 元1122P
つまりとこ

4,291P

ほと 小林 こと
十 172 保有

はせん
所有 保有

H31(2019)9.10(水) ~

F4/11
4/10

*

う。へ「甲骨文の世界」白川静、平凡社、六
ハ負参照
斑鳩宮内で、馬の骨をト辞に用いていたと
も考えられようが、一か所詮、本当のそこ
ろは知る由もない

なお、
「山背大兄は、馬の骨を内寝に投げ置い
た」
というのだから、
常時か、たまに
内、馬の骨を所持していた、ということか
分かる。
では、一体何の爲に、馬の骨を斑鳩宮に保
有していたのか。
殷では、白馬をト辞に用いた例があるとい

45.6.27(日) ③ 3234P 小町 35-35
22.6.42 新町 11.82 上野 185P
22.6.42 新町 11.82 上野 185P

4.292P 1/2 焦土(焼け跡) 4-林 608P
#上下184P

22.6.42 新町 11.82 上野 185P
22.6.42 新町 11.82 上野 185P
22.6.42 新町 11.82 上野 185P

山背大兄王らの自決

あつ 指差す方を見と、まさしく斑鳩あたりに

火の手があがっていった。

巨勢徳太臣らが、斑鳩宮に火を放ったのだ

った。

斑鳩宮の焼け跡の灰の中から骨を見つけた

巨勢徳太臣らは、誤って一瞬で

王が亡くなった

と思つた。だがよく見ると、馬の骨であつた

斑鳩宮の焦土をとり囲んでいても仕方が

ないので、やかて包囲を解いて退去した。

その後、四、五日の間、山背大兄王たちは

山にひそみ、食べ物をとることもできないで

いた。

しかしそんな山中にまでも、入鹿の軍の捜

索の手が迫ってきた。

時に、山背大兄王は、

戦いに勝つのも丈夫であらうが、身を捨

てて国を固めるのも亦丈夫ではあるまいか

と仰せられた。(「朝日新聞」平成二年十一月十六日付合人

4.293^F-1/2
4293^F-1/2
3686^F 4209^F 中快

灰燼に降す云354^F 476^F 425^F
紀下252^F 紀下252^F 45^F

新刊 248頁

隆寺西院

「^{やましろのおほえのみこ}山背大兄王^きたちは、意を決し、^{やま}山か
ら^{かえ}還ると、^{かいじん}灰燼に^き歸して、^{いかるがでう}まつた斑鳩宮の西
方に^{ほう}あつて延焼をまぬがれた^{いかるがでう}斑鳩寺の塔内へ
お入りに^{はい}なつた。^{いかるがでう}（補願記参照）
■なお、ここに^{いかるがでう}斑鳩寺とあり、
へ^い推古三十一年（六二三）三月の釈迦三尊
像の完成とほぼ同時期に、^{いかるがでう}斑鳩寺へ^い現法
伽藍も再建された^い（推古三十一年（六二三）同三十八年（六三六）
と解される。^い（巻頭の第10表参照。既述）
■つまり^{やましろのおほえのみこ}山背大兄王たちは、現在の大和国
^い皇極二年（六四三）十一月に^い法隆寺の五重^い塔^い内へお入りになつ
たのであろう、と推察される。^い（写真図版690）
へ^い法隆寺五重塔^い参照^い）
＊
■^い入鹿の軍の^い軍将等は、^いすぐに^い斑鳩寺を^い囲んだ。
■^{やましろのおほえのみこ}山背大兄王は、^い三輪文屋君を^い通して、^い軍将
等に^いこう^い言^いわれた。
と^い勝つ。^いしかし、^い一身の事情のため^いに百姓を

カラー
・頁全用。上干に大まか
はみ出17 掲載下さい。

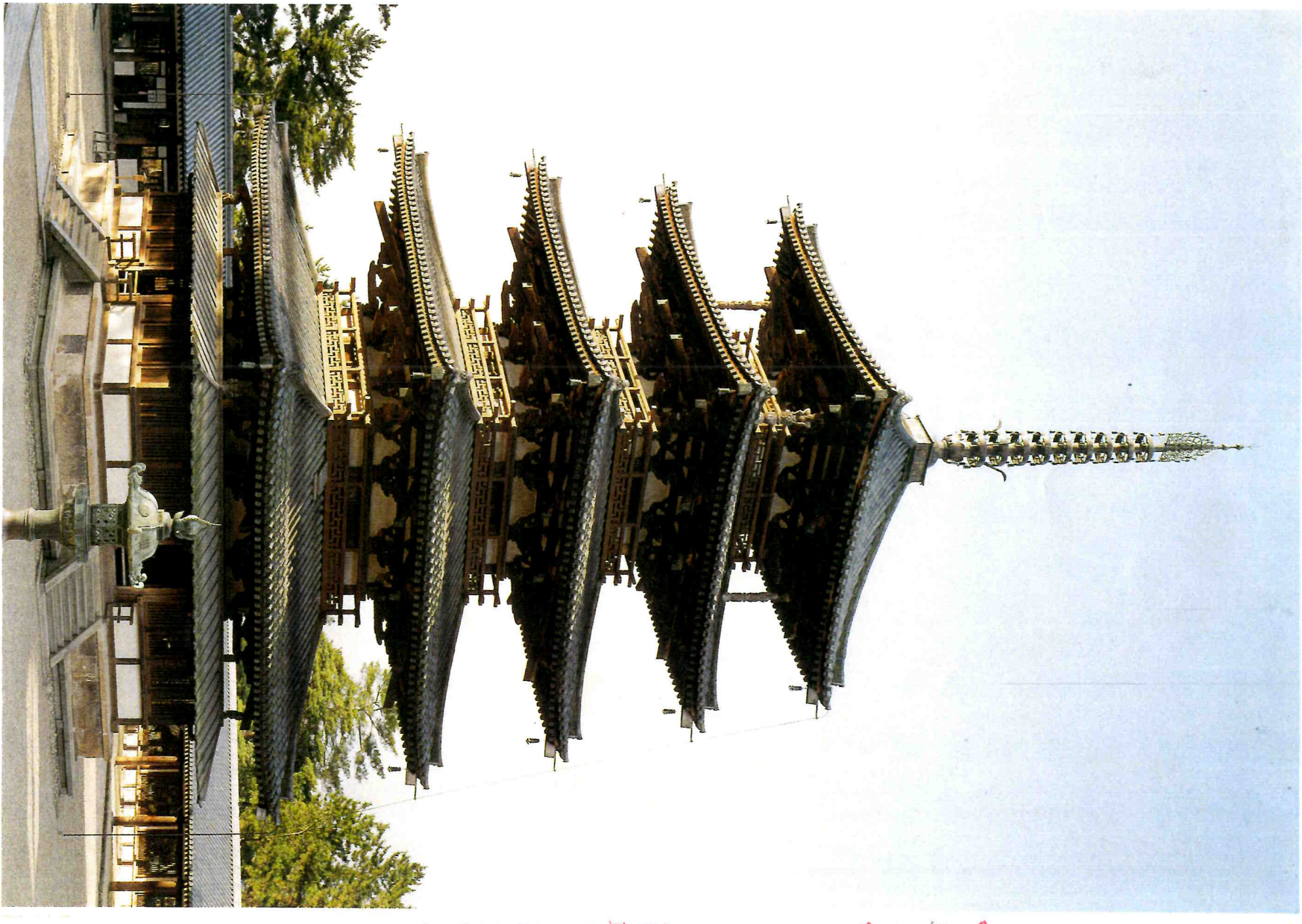
・少し左へ
傾いて113
ようです。
垂直に
17下さい。

→
21
22

4.293¹⁷ - 2/2

←ヨゴレと11

・85



←ヨゴレと11 (左端から3センチ) 109

82.21

1404

思真図版

690

法隆寺

五重塔

83.21

1304

『法隆寺金堂壁画』法隆寺監修、朝日新聞社、1994年11月15日発行、76頁参照

(こ)

#上下186

藤原二187
紀下252 126

藤原上60
紀下252 126

小井
叔 183
姉 285
おは

4294P

山背
弟妹
11人

下
下る

傷つけ殺すことはしたくない。それゆえ、吾

が一つの身を入鹿に賜う

こうして山背大兄王は、子弟・妃妾とも

ともに、みずから首をくくり、あいともにあ

なくなりになった。

帝説は山代大兄及其昆弟等合十五王子等

悉滅之也という。

補闕記は男女廿三王無罪被害とい

二十三人の名を全部あげる。聖徳太子の弟妹

すなりち山背王の叔姑にあたる人が四人、太

子の諸子すなりち山背王の弟妹が十一人、山

背王の諸子が八人である。一か、これは系

譜で知られる太子一族の名を列举したまでで

二十三王がこの時に死んだわけではあるまい

ともいわれている。『日本書紀』(下)日本古

典文学大系、岩波書店、二五二頁注六参照)

それにしても、何という傷ましきであらう。

幼氣盛りの子等までをも道づれにして、十数

名、あるいは二十数名もの上宮太子の血族の

者達か、斑鳩寺の五重塔の中で自害

して果てたというのである。

4,296^P

む(うま 2151)
無事 人の心をなやまして
歎く(嘆) 21655

161 4298^P11行

た 龍む 21404

雲などか低くこめて
161 4294^P12行

低い 4294^P9行

いた蘇我入鹿が、血相を変え、あたふたと
駈けつけてきた。

この世のものとも思えない、杜巖な様を仰ぎ
見て感嘆し、胸打ち震わせ、近き悲しんでいた

人々は、五重の塔の方を指し示した。

だが、どうしたというのだろう。

先程まで確かに見えていた五つの色の幡や
蓋等はもはや消え失せてしまっており、
垂水龍めえ思薄闇があたり一面を覆っている

ばかりだった。(紀)

五重の塔の軒々の風鐸の音が、人の世の無

常を歎くかのように、カラン・カランと哀し
げに鳴り響いていた。

*

その一部始終は、遠い西方の大倭国(肥後

国)にも、ただちに伝えられた。

蘇我大臣蝦夷は、

山背大兄王等が、ことごとく入鹿に亡さ

た

令和2(2020)5.24(日)~5.26(4日)
令和3(2021)3.13(土)~3.15(4日)

H9.2.10(月)
→ H5.6.29(木)⑥

563.7.6(木)⑥ 予見 2276P
→ 扶桑50 俵む 119P 4.297P

こと 紀下252P #上718P 怒り 96P

3/5 1F 3/14

という知らせを聞くと、怒り罵って、
「ああ、入鹿はなんと愚かで、乱暴な過ち
をおかしたのだ。そのようなくとをしたら、お前
の命もどうなるか分からないぞ」と
言った。(紀)

また、意図したわけではなかったにせよ、
「蘇我入鹿の軍が山背大兄王らを死に到ら
しめた」という事実はいくらもなおさず、
へ入鹿の命のみならず、蘇我氏の命運まで
も定かならないものにした。

扶桑略記の皇極二年条には、
「入鹿之父蘇我大臣蝦夷聞而嘆言。太子々
孫。横殺害之。我等亦亡不ス」と記されて
いる。そして、蘇我大臣蝦夷のこの悲壮な予見は
次第に現実のものとなってゆく。

日を追うごとに、人々の心は、蘇我氏を離
れていくようになっていった。

4332 159

紀下253 268

水戸 551

4256 井上187 641年 中大兄16才

紀下253 注21 644 30 1

63.7.7(推古23年615) 紀下253 5723 ↓

4,298

4332

中臣鎌子(後の藤原鎌足)のち、ふいけらのかまたり。
 章八相良親王、吾平山陵において詳述。
 白王極三年(六四四)正月一日、中臣鎌子
 連(鎌足)を神祇伯に任した。美気古の長子
 として推古二十三年(六一五)に誕生した。
 鎌子連は、この時三十歳になっていた。
 鎌子連は、再三固辞してその任につ
 かず、病と称して退出し、三島に住んだ。
 通常、鎌子連は攝津国三島郡に住んだ
 と解さゆ、浪川中流域の三島に地理的に相当
 する所、中臣氏の大倭国の本居地、菊池
 に住んだ、この物語では考えてみた。
 * 参考迄に述べると、和名抄に「菊池郡水
 島」という地名があり、ミシマとも訓める。
 そのころ、軽皇子(敏達天皇の曾孫で、押
 坂秀人大兄皇子の孫。皇極天皇の同母弟。後
 の孝徳天皇)も、脚の病にかかって、
 延に出仕して、いなかた。(巻末の皇室系譜参照)
 中臣鎌子連は、軽皇子こそ天下の王にな
 即位しては、いものたと願って、いたが、その
 前に、先ず、蘇我入鹿を倒さなければなら
 ない。追て述べるとあり、軽皇子(後の孝徳天皇)も又、大倭国(肥後国)へ行
 かれたようである。

紀下254

訓

大ワ2085

114

単位の頃
20年
1457
3年

698P
紀下255注18

ヤマト紀161-15
#ニ下188P
紀下254

フミ 小林526
ワヤキ
4,299P
紀下254

小林539
改訂
589P

紀下254注18

家伝 = 藤氏家伝 日本文184

ないと思つた。
ここに鎌子連は、
し、それとなく試み、
るに足る英明の主を求めた。そいつやがて、
中大兄こそ、と心に定めた。
中臣鎌子が中大兄に心を向けた理由
を、家伝(藤氏家伝)は、
「軽皇子器量不足と謀大事、更欲扶君」といふ。
鎌子の心は、
へと傾いて、たのであろう。
とはいへ、中大兄に近づいて、心中の幽抱を展べる機会はない。
たが、ついにある日、偶々中大兄が法興寺に参詣した。
肥後国益城郡城南町陣内の「陣内麿寺」であらう。
水の時、
七間半四方の蹴鞠の庭の中で繰り広げられ、
優雅な打毬は、革沓を履き、
き、鞠庭の四隅に植わった木から伸びる下枝

次から次へ
王家の人々と接触

紀にこう記されている

(こ)

綱

中大兄

644

巻之五 588

4,300P

井工下188

(か) 前頁14行

改行

改行

第二十章【歩】において既述

より高く蹴上げることを続ける遊戯である。
 ところから中大兄が靴を蹴った時、
 皮靴が脱げ、打った靴と共に空を舞
 い、地に落ちた。鎌子連は、その皮靴を拾う
 と、掌中に取りもち、進み出て跪き、恭んで
 奉った。中大兄も向かいあって跪き、うやうや
 しくそれをおとりになった。
 こうして、**なん**皮肉にも、崇峻元年（五
 ハハ）に蘇我馬子が発願して建立した**法興**
 寺におりて、五十六年を経た今、
 蘇我氏滅亡を企てる二人の絆が固く結ばれた
 のだった。
 この後、中大兄と鎌子とは、あい親しみ、
 心にいだいてゐることを互いに匿すところ無
 く語りあうようになった。
 頻りに接触する人々と他人が疑うのと恐れ、
 もに書物を手にし、周孔の教え（儒教）を
 南洲先生（南洲請安）のもとで学んだ。そ
 て、往復の路上で肩を並らべ、密かに計略を
 立てた。二人の意見はことごとく一致し

(こ)

ひさすくとかけ
跪 F211

(こ)

H5.6.30(水)⑤

紀下256

紀下255, 368

4,301¹ - 1/3

ていげん 18
は 4316
いと 4325

紀下255 注22
市 4325

紀下254^P
#下180^P
珠3 紀下254 年38^T

た。 是に、中臣鎌子連は、
大事を謀る時には、助力者があるに
た。ことはありません。蘇我倉山田石川麻呂、馬子
の孫。雄正（倉麻呂ともいう）の子。入鹿の
従兄弟。翌年、右大臣になる。の娘を
妃として縁組みされ、そのあとで委細をあ
かし、成功へのなにより近道でございませう。
と提案した。蘇我倉山田石川麻呂が、従兄弟である入鹿の暗殺に加担し、その後
右大臣にまで取り立てられて、こうきみとぐり、この提案には、そ
れなり、大まな理由があったのだうう、と思われる。
中大兄は、この提言に従って、
蘇我倉山田臣の少女遠智娘（大田皇女）および
持統天皇の母を妃とした。（巻末の皇室系譜参照）
中臣鎌子連はまた、佐伯連子麻呂・葛城稚
大養連経田を中大兄に推荐し、云々と言っ
た。
このようにして、内密に着々とす
められていった。うめは、西の大倭国（肥後
国）でのひそやかな出来事であつたらうか。

*

■ 察するところ、
① 往古の人々は、日襲名の儀式をとり行なう
ことによつて、良き時代をそつくりそのまま
親から子、子から孫へ伝えたいと願つたよ
うに思わゆる。孫から曾孫へと次々に
つまり、人々は、
へ倭王（天皇）を頂点とする貴族社会を、
できるだけ昔日の通りに維持したい
と切望したのであつたと想像される。
② ところが、中臣氏嫡流の
へ用明二年（五八七）中臣勝海連が斬
殺されてしまつた。
のだった。（既述）
中臣氏の本家筋が滅んでしまつた後に、
系筋であつたにもかかわらず日中臣氏を名
乗つて朝廷へ出仕することとなつた者達は、
――従来からの名門である蘇我氏や大伴氏
などに対して、ある種のひきめを感じていた

日本書紀中において、蘇我氏を
悪者に仕立て上げたのが藤原氏か?

4,301^P-3/3

徐々^{いほほ}
な^な1121^P

そが^{そが}1299^Pもん^{もん}へん^{へん}えん^{えん}2209^P
疎外^{うとん}うとん^{うとん}門閥^{もんぼく}い^いえ^えが^がら^ら
よ^よそ^そに^にお^おす^する^るに^にい^いえ^えが^がら^らの^のふ^ふい^い家^か

の
か
も
知
れ
な
い
。
い
や
、
も
し
か
し
た
ら
、
新
た
に
日
中
臣
氏
に
を
称
し
た
者
達
は
、
血
筋
を
こ
そ
重
視
す
る
門
閥
貴
族
た
ち
の
社
会
の
中
に
溶
け
込
め
ず
、
か
ら
出
来
ず
、
疎
外
を
持
ち
、
一
つ
う
つ
と
し
た
反
感
を
抱
い
だ
い
て
い
た
の
で
は
な
か
ら
う
か
。
■
そ
う
し
た
ゆ
け
で
、
こ
れ
か
ら
後
、
中
臣
氏
へ
藤
原
氏
へ
は
、
我
が
国
創
建
以
来
、
ず
つ
と
一
途
に
固
執
さ
れ
て
き
た
確
固
た
る
社
会
構
造
を
無
視
す
る
か
の
よ
う
に
、
徐
々
に
な
か
ら
他
氏
族
を
押
え
の
上
か
っ
て
ゆ
く
の
で
あ
ろ
う
✓
と
定
か
な
ら
な
い
もの
な
が
ら
想
察
さ
れ
る
。
＊

4.5.7.1年 ⑤

前139 前64
紀下259注16 4.303P-1/2

もしかたら
④4305P-3/4 恨みを買った 365
⑤

言いたげ ④4287-1/31年
言いたるに ④4320P24

入鹿の家を曰谷宮門と呼び、男を王子
と呼んだのだろうか
と疑問に思われる。
「そ小ほとまでに、蘇我父子は驕り目印
といたしなげである
だけであつて、何一つ得にならない
そのよう
なことを、自ら言う歌はあるまい。
もーかいたら、蘇我大臣蝦夷の家は、三つ
あつたのかも知れない。
①甘檮岡（奈良県高市郡明日香村にある丘）
②畝傍山の東。
③更に下詳らかでないが、聖徳（上宮）太子と
蘇我大臣馬子とか斑鳩宮の夢殿で多忙な日々
を過ごしていた頃の馬子の家が、その当時のま
ま
斑鳩宮の門（上宮太子の宮の
門）のところにあつたの
その家は、曰上宮門と呼ばれていたので
あつたうか。

子^ニの男^{もの}曰^い皇子^{みこ}は、等^と子^よ刀^と弥^み々^々大王^み（上^う宮^{みや}太^{たい}）
子^ニと^と呼^よび、親^{おや}と^と慈^{あはれ}人^{ひと}で^でいた^{いた}の^のあ^あら^らう^うと
推^{おし}察^ささ^さし^しる^る。

ともあ^あれ、ど^どう^うと^とで^でも^も解^と決^{けつ}で^でき^きる^る文^{ぶん}面^{めん}で^であ^ある^る。

また、^{また}家^{いえ}の外^{そと}に^に城^{しろ}柵^{さく}を^を作^{つく}り^り云^い々^々と^とい^いう^うに^にま^まか^かな^な描^え写^{しゃ}も^も、恐^{おそ}ら^らく^くこ^この^の当^{とう}時^じに^に特^{とく}に^に異^い様^{よう}な^なこ^こと^とで^では^はな^なか^かつ^つた^たの^のあ^あら^らう^うと思^{おも}わ^われ^れる^る。

*

1895

1587

1273

2052

594

4,304

君太郎

43

263

230

136

1591

① 蝦夷は、中華思想にもとづく夷狄観による
 後代の蔑名で、本来は毛人、豊浦大臣と呼ばは
 れた
 ② 入鹿は、易占の際に数とされた入鹿(魚)
 によって命名されたあとからの蔑名らしい
 もともとは鞍作という名で、蘇我林臣鞍作・蘇我大
 郎鞍作・林太郎・君太郎・林臣などと呼ばれた
 という。(「日本史辞典」東京創元社「蘇我
 蝦夷・蘇我入鹿」参照)
 いかし、先に述べたとおり、我が国には卑屈
 なまでにへりくだる風習があったようである
 ④ そいて、
 へ臣下の者達は皆、それぞれに、自分の為
 の卑称を持っていたので、
 毛人、蘇我、伊賀、加

蘇我-仁教
中臣-神

天つき
改竄

読美 930 815
1883

4.305 P 1/4

二板五

あざま 34 352 卑称 1892
悪様 減 35 2052 処 1121 1895 3/4 大腹 1342 改竄 1221
3256-3/3

と想像される。

たぶん

日蝦夷にも、

日入鹿にも、

本人自身が名乗っていた日卑称だったの

あろう。(第二十七章へ卑称)等において既述

■それにしても、我々は、

へ蘇我氏が滅んだ後、誰かか日本国

の正史である日日本書紀の処々に手を加え

蘇我氏のことを容赦なく扱き下ろし、悪様に

書きしるした

と考えるべきなのではなかろうか。

■なお、蘇我氏を烈しく非難めいて述べる

一方で、中臣氏(藤原氏)を殊更なまでに讃

美しているところから推察すると

へ日本書紀が現状通りのものとなる迄の間

に、藤原氏の大きな介入があったのであらう

と思われる。

■人の世の常のことながら、

他者を悪く言い、己の立場をより良く

見せよう

とする内層心理が働いていたのだろうか。

■ いやいや、それだけではあるまい。

へ古来、朝廷の祭祀をつかさどってきた中臣氏の本家筋は、仏教受容に反対し、滅び去った。

のだった。(既述) 藤原氏にとって

敬い、仏教の世界観を大々的に展開していた(宿

敵)蘇我氏は、どんなに憎んでも憎みきれない

ほど、疎ましかつたのかも知れない。

■ では、何時藤原氏が介入したのか、あううか

等(鎌足の次子。右大臣。光明皇后の父。元

五九(七二〇)の力はすでに、押え難いばかり

の大きな存在となっていた。

といえよう。

とはいつて

日本書紀完成(七二〇)頃は、

天武天皇の系統の諸天皇の時代であつたから

不比等か、天智天皇と深いむすびつきのある藤原

不可能なことがあったように思われる。

184かん
日本史解184「家伝」
冠位12階の表 3977-34

武智麻呂
日本史解869
4,305^P-3/4
1行性

184かん
掌握1081^P 光云754^P 4303^P-1/2
810123 10行

あるいは、
①天智天皇系の「光仁天皇」(天智天皇の孫。
施基親王の第六王子)が七七〇年に即位され
藤原氏が朝廷をも動かす大きな実権を掌握し
た後、日本国中の全ての「日本書紀」は
ことごとく一堂のもとに集められた。
②そして、現状のように書き改められた「日本書紀」
通り、元の所有者「筆字」させた。
ということなので、なかろうか。
「因みに述べる」と、「家伝」(藤氏家伝とも
いう)について、次のように解説されている。
「家伝は、藤原氏の始祖たちの伝記。上下
二巻。上巻は「鎌足伝」で、「大織冠伝」も
称され、「太師」すなわち藤原仲麻呂の作。
下巻は「武智麻呂伝」で、「延慶」という僧
侶の作といわれている。上下巻とも、七六〇
年(天平宝字四年)一し八月ごろ、仲麻呂が
父祖の功業を顕彰するために作成したもの
と考えられる。上巻は、鎌足没後まもなく作ら
れた「原伝」をもとにして、仲麻呂が執筆しな
した。また、貴人所有の日本書紀は、改竄済みの日本書紀と
取り替えられた。

しょうけん元 かいけん元 せきせ
 称讃 1092 改竄 352 全盛 4.305-44
 ④ 4.305-1/4 元 1268 4.305-44
 ⑤ 4.305-3/4 2-3 鎌足 時年 863 日本史 184
 614-669 天つき 改行

おいたものである。日本書紀にもその編纂
 にあたつてこの原伝記^{りやうでん}記^きを利用^{りよう}してゐるので、
 両者は兄弟^{きょうだい}関係にあると考へられ^らる^るし
 という。〔日本史辞典〕東京創元社、八家^{はつか}
 伝^{でん}参照

おそろく

〔日本書紀〕^{りやうでん}〔養老四年^{りやうろう}（七二〇）撰^{せん}〕の諸^{しよ}処^{ちよ}
 に^に藤原鎌足^{ふじのうのかみたり}（六一四―六六九）没^{ぼつ}後の^{ごの}

七六〇年ころ作成^{さくせい}された日本書紀（藤氏^{とうし}
 家伝^{かでん}）の記事^{きじ}が挿入^{そうにん}されてゐる

（天智天皇系^{てんちてんかう}の日光仁天皇^{にこうにんてんかう}が即位^{きてい}された七七〇年以後^ご）

のであろう

すなわち

〔日本書紀〕は、藤原氏興隆^{ふじのうのきりやう}の頃^{ころ}に改竄^{かいせん}
 が行なわれ、その時、密かに日本書紀（藤氏家伝^{とうしのかでん}）
 中の文言^{ぶんごう}がとり入れられて鎌足加称讃^{かみたま}といふ
 一方、蘇我氏は悪逆^{あくぎやく}の臣^{しん}とされたのだらう

と定かならないものの、考察される

① 日本書紀と記されてゐるが、その日本書紀は
 ② また、日本書紀が〔藤氏家伝〕、日本書紀を利用^{りよう}
 したという証拠はあるのだらうか
 と不審に思へれる